「元気な私たちが未来を築く～価値ある専門性を求めて～」

平成24年度「近畿老人福祉施設研究協議会」奈良大会

平成24年度近畿老人福祉施設研究協議会奈良大会が19日に全体会、20日には研究分科会を両日、奈良市内で行われた。大会テーマは「元気な私たちが未来を築く～価値ある専門性を求めて～」。老人福祉施設の専門性を高めるとともに、改正された介護保険制度などの報告との整合性を図っていくことなどを目的に、県内では6年ぶりの開催。近畿2府4県の老人福祉施設から1300人が参加し、来賓として杉田憲英県副知事、仲川元庸奈良市長、中田清公益社団法人全国老人福祉施設協議会会長らが招かれた。

全体会

なら100年会館（奈良市三条宮前町）での全体会では、開会式典、公益社団法人全国老人福祉施設協議会の中田会長による情報提供、「介護職のためのセルフケアのすすめ方」と題する東谷典男・県立医科大学教授の講演、「いのちの素晴らしさ～奈良に暮らし、想いをかたちにする」をテーマに、映画監督の河瀬直美氏、森下豊橿原市長、近畿・奈良県老人福祉施設協議会の辻村泰範会長によるてい談が行われた。

開会式典では、奈良大会実行委員長の林義弘氏（社会福祉法人長命荘理事長、生駒市）が「2025年のあるべき介護の姿を念頭に、元気な私たちが未来を築けるよう、価値ある専門性を求めて開催するもの。会議を実りあるものにしたい」と開会宣言。

続いて、辻村会長（生[illegible]福祉事業団理事長、生駒市）が「制度と現場、理論と実践は表裏一体。制度改革が現場の声を反映したものになるよう、われわれは発信力を高めていかなければならない。未来[illegible]で専門性を高めていく。この大会の意義は深い」とあいさつした。

杉田副知事は「分科会を含めたプログラムをみると、どれもが老人福祉の重要なテーマ。日本では介護と医療、介護と住宅など、米国に比べて十分とは言えない。互いの専門性を高めていく研究協議会の役割は大きい」と祝辞を述べた。

また、全国老人福祉施設協議会から感謝状が贈られ、代表して特別養護老人ホーム信貴苑の鈴木雅世生施設長が、中田会長から感謝状を受け取った。

林実行委員長が開会宣言

あいさつする辻村会長

祝辞を述べる杉田副知事

中田会長（左）から感謝状を受ける鈴木氏

会場入り口で、せんとくんらがお出迎え

講演「介護職のためのセルフケアのすすめ方」　東谷典男・県立医大教授

心身の健康、5つのポイント紹介

セルフケアの大切さを訴える東谷教授

介護職は大変な仕事。自分自身の心身の健康が大切であり、「血圧」「メタボリックシンドローム」「運動」「喫煙・飲酒」「腰痛」の5つのセルフケアポイントを提案したい。

血圧は変動するものが普通。何度か測って自分の平均値を知っておく必要がある。血圧が高いこと自体が問題ではないが、高血圧が続くと動脈硬化が進み、脳卒中、心筋梗塞などの循環器疾患の死亡リスクが高まる。減塩、適正体重の維持、節酒、有酸素運動、野菜・果物の積極摂取、禁煙の6つのセルフケアが必要だ。

次は、メタボリックシンドローム対策。肥満と肥満症は違う。肥満症とは、肥満が原因で疾病を招く病[illegible]が増加すると、心疾患リスクとも密接に関わり、BMIの適正化が必要だ。

適切な運動は血圧を下げ、心疾患リスクを軽減させる効果を持っている。有酸素運動が効果的だが、その運動を習慣化させることが重要だ。自分が続けやすい、好きなものを継続したい。

喫煙は趣味・嗜好の問題と言われるが、命と健康の問題だ。口腔・咽頭がんなどのリスクが高まる。飲酒は適正量を守ることが何より大切。

最後は、介護職に多い腰痛。毎日の職場で工夫することで負担を軽減することが可能だ。例えば、ベッドの高さを40㌢から60㌢にするだけで、腰をかがめる角度が65度から35度になり、負担が全く違ってくる。もちろん、補助具や保健具を活用することも有効。最近では、無理のない範囲で動かすことが有効という流れになっている。

てい談「いのちの素晴らしさ～奈良に暮らし、想いをかたちにする～」

忘れかけた物が奈良に　河瀬
日本の出発点の美しさ　森下
命の輝きが見える仕事　辻村

映画監督　河瀨　直美氏

橿原市長　森下　豊氏

近畿・奈良県老人福祉施設協議会会長　辻村　泰範氏

―命の素晴らしさを奈良で表現している、映画監督の河瀬直美さんをお招きしました。奈良は、どんなところが魅力ですか。

河瀬　奈良には神社やお寺など、神様やご先祖様にお祈りをささげる、または人々が心寄り添うところがたくさんあります。そこが魅力ですね。都会では、スマートさ優先の世界が整備されすぎているような気がします。

映画「朱花（はねづ）の月」は大和三山を舞台にしていますが、今を生きる人々、いにしえの人の魂が重なり合うところを表現しています。日本人が忘れかけているものを、奈良は持っているような気がします。

森下　この映画作品は橿原市をはじめ、高取町、明日香村がスポンサーになっています。飛鳥地域を世界遺産にしようという運動の一環で映画の製作を決めたのですが、[illegible]カンヌ国際映画祭コンペティション部門に正式にノミネートされました。既に、世界10カ国以上で上映されています。日本の出発点である飛鳥地域の美しさを、ぜひ世界の人たちに知ってほしいと思っています。

―誰にも、愛着のある風景があるように、住み慣れたところで暮らしたいという思いがあります。

河瀬　カンヌ国際映画祭グランプリを受賞した作品「殯（もがり）の森」は、日本の映画関係者の間では実はあまり評判が良くなかったんです。過疎の進む村の、ある[illegible]が崩壊していくという話で、「地味で暗い」（笑）。

フランス人の審査員に「どうして受賞できたの？」と聞くと、「僕の村も、君の映画と同じような光と風が吹いている」と答えました。奈良の山間部とフランスの田舎が、世界共通の価値を共有できたことに驚きを感じました。

―高齢者が住み慣れた地域で、手掛けていくべき支援とは何でしょうか。

辻村　家族や地域の中で高齢者を支援していくことは、簡単ではないと思います。なぜならば、隣近所に誰が住んでいるかも知らない人が多いなかで「地域」という言葉が簡単に使われすぎているからです。地域包括支援制度も同様で、制度を整えたから、それでOKというわけではない。

ただ、高齢者の方が住み慣れたところで穏やかに暮らしたいという意向は尊重すべきで、そういう観点からすると施設も、そこにいるスタッフも、その高齢者の家族や地域を感じてもらえる開放的な空間である必要があるのかもしれません。

河瀬　制度が先にあると締め付けられる気がしますが、人と接している以上、制度からはみ出た時にどれだけ許容できるかを考えることが重要なのではないかと思います。ある意味での緩さですね。映画も、設計図はありますが、アクシデントはつきもの。そこが良い味になって、作品が仕上がります。

―「殯の森」は、認知症をテーマにした映画ですね。作ろうと思われた、きっかけは何ですか。

河瀬　私のおばあちゃんが認知症にかかったからです。当時、私は反発していました。彼女は、両親を知らずに育った私の育ての親でした。とてもしっかりしていましたが、そんな人でも認知症にかかってしまった。子育て期と重なって、とてもいらいらしました。「なんでやの。もっとしっかりして」って。

こうした思いは、多くの方がお持ちだと思うのですが、そんな時、ある人から「地域の第三の力を利用しなさい」という言葉をもらいました。それが施設だったんですね。当時は、家族で看ることが当たり前という風潮が強かった。自身の葛藤（かっとう）から発案して、プライベートな部分から入った映画です。

森下　10人に1人ぐらいは認知症という病気にかかる。これは病気なんだという意識を社会的に広めたり、予防策を研究することも重要です。かかってしまったら、真正面から立ち向かう。それしかないんですね。

―本日の大会への感想やメッセージをお願いします。

河瀬　認知症のおばあちゃんは、認知はできないが、感情は最後までありました。苦しみも喜びも薄れていくかもしれないが、最後には感情が残る。老人福祉施設はつらいお仕事だと思いますが、同時に喜びもあると思います。常に最後まで寄り添えるよう、皆さんに頑張っていただけたらと思います。

辻村　人生を苦しみととらえるか、甘美なものととらえるか。お釈迦（しゃか）様は、その二つが両端にあるのが人生だとおっしゃったそうです。命は見えないが、命の輝きは見える。こんな素晴らしい仕事はないのではないか。「命」というものをキーワードに考えると、みなすごい仕事に関わっているのだと、あらためて感じました。

奈良で暮らすことなどについて語り合う

研究分科会

問題提起やプレゼンに有識者・専門家が助言

研究分科会は9つのテーマ別に行われた。座長、副座長による進行のもと、テーマに沿った各施設からのプレゼンテーションに対し、医師・有識者、老人福祉の専門家らが助言する形で実施された。各分科会のテーマと概要は次の通り。

第1分科会　これからの認知症ケア

■座　　長＝塩崎万規子氏（祥水園）
■助 言 者＝末長敏彦氏（天理よろづ相談所病院医師）
■問題提起＝一人ひとりの認知症高齢者にどう関わるか、具体的な実践を学ぶ
■プレゼンテーション＝その人らしい生活の継続方法。うまく相手に意思表示できない高齢者に対して、寄り添う気持ちの大切さ。野菜作りを通した、自然と接する生きがいづくりなど

第2分科会　在宅サービスの今と未来について

■座　　長＝大國康夫氏（あすなら苑）
■助 言 者＝小川栄二氏（立命館大学産業社会学部教授）
■問題提起＝多種機関や地域との連携など、在宅サービスの今と未来
■プレゼンテーション＝デイサービスにおける送迎サービス事故ゼロ件を目指した取り組み。食べる機能改善と健康維持を考えた口腔ケアの取り組みなど

第3分科会　施設で看取るということ

■座　　長＝玉利伊代子氏（ゆぅほうむ榛原）
■助 言 者＝鳥海房枝氏（NPO法人メイアイヘルプユー）
■問題提起＝「終（つい）の住処（すみか）」としての特養の機能と、利用者や家族との関わりについて考える
■プレゼンテーション＝看取り介護から学ぶケアのあり方。普段から本人や家族と関係性を築く、毎日の支援が看取りにつながるなど

第4分科会　施設に必要なリスクマネジメント

■座　　長＝奥本孝史氏（サンタ・マリア）
■助 言 者＝御部武史氏（日本経営リスクマネジメント）
■問題提起＝災害に対する備え。利用者に安全・安心なサービスを提供するための実践例。危険を回避するためのリスクマネジメント
■プレゼンテーション＝リスクマネジメント委員会の立ち上げ。ヒヤリ・ハットの活用とその事例。情報共有の大切さなど

第5分科会　高齢者の食生活と健康～「おいしく食べる」を支援する

■座　　長＝井上太氏（延寿）
■助 言 者＝兒山左弓氏（浜松大学健康プロデュース学部健康栄養学科教
■問題提起＝高齢化や疾病に伴い機能低下する「食べる」ことに対し、「最後まで口から食べる」重要性を認識し、支援方法を学ぶ
■プレゼンテーション＝食事は生活の一部であるだけでなく「楽しみ」でもある。食と健康に携わる職種の連携が必要。嚥下（えんか）食の取り組み。「見た目」の大切さが食欲を増すなど

第6分科会　施設が果たす質的向上への工夫

■座　　長＝山本茂雄氏（国見苑）
■助 言 者＝野田秀孝氏（国立大学法人富山大学人間発達科学部准教授）
■問題提起＝利用者の心身の変化に対応する現場職員の創意工夫と実践例
■プレゼンテーション＝食べられない、むせるなどの症状を持つ高齢者に対しての科学的データの蓄積を行い、症状の改善を見える化。脳梗塞による入院経験を持つ高齢者ケアに、身体的拘束を廃止し、経口摂取に挑戦し、歩行、活動範囲が広がったなど

第7分科会　介護現場の人材確保と育成

■座　　長＝上田勝一氏（ウォームヴィラ新庄園）
■助 言 者＝廣岡陽之氏（特別養護老人ホームエーデル土山副施設長）
■問題提起＝人事考課制度の構築事例、業務改善、意識改革、人材配置などの事例を知る
■プレゼンテーション＝能力チェックシートを活用した、個々の資質とチーム力の向上の取り組み。能力開発ガイドラインを活用。職員が目指すコースを定め、目的に応じた教育プログラムを実践したなど

第8分科会　養護老人ホームの現状と課題～養護の明日への学びとわから

■座　　長＝平岡毅氏（聖ヨゼフホーム）
■助 言 者＝岸田肇氏（養護老人ホーム成相山青嵐荘施設長）
■問題提起＝生活支援施設としての役割が求められる養護老人ホームにおける「処遇＋サービス」の質的確保
■プレゼンテーション＝利用者の重度化、ニーズの多様化に伴い、見守り機能の強化や専門知識の習得が必要など

第9分科会　軽費老人ホーム・ケアハウス等の居住系サービスの効果と課題

■座　　長＝北村明子氏（トマトホーム）
■助 言 者＝藤井由紀子氏（ふじ社会福祉士事務所代表）
■問題提起＝地域包括ケアシステムの進展に伴う、居住系施設が果たす役割と課題
■プレゼンテーション＝人への過度な干渉、集団生活を嫌うなどの高齢者に対して、ボランティア活動など社会性を涵養（かんよう）する導きが必要。医療、介護といったフォーマルな部分を含め、地域と密接に関わることが居住型施設として重要など